現代女性の自己実現過程－異性との関わりにおける自己の内的な変化－

Ａ５３８０１　沢口綾

【背景と目的】

Ｃ．Ｇ．ユングは、個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を「自己実現」の過程(または個性化の過程)と呼び、人生の究極の目的と考えた(河合,1967)。人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに共通した基本的な型(元型)を見出すことができると考えたユングは、夢の中に現れる異性像(男性の場合は女性像、女性の場合は男性像)が心理的に非常に重要な意味を持つことに気づき、それらの元型として、女性像の場合をアニマ、男性像の場合をアニムスと呼んだ。それら元型は実際の異性に投影され、われわれの内的な発展は、それらの外的な関係とも関連づけられてくる。

本研究では、生き方が多様化してきた現代の女性に焦点をあて、またその中でも内省をよく行うと推測される心理職に携わる者を面接対象とし、実際の親密な異性との関係を尋ね、その中で自己実現を発展させてゆくということはどのようなことであるかを検討することを目的とする。

【方法】

心理職に携わる３０代女性の中で、面接調査に協力可能な２名を選出し、被面接者自身のパーソナリティについて、印象に残っている異性との交際、その相手に感じていた印象と自分の比較、その相手との関係の中で生じた葛藤や困難について、などを尋ねる質問により構成された半構造化面接を行った。

【結果と考察】

事例１においては、理由が明確ではないがすごく好きだった、という異性との関係を中心に伺った。いままで親密になった他の異性とは違い、その異性に対しては無意識的領域が広いままの恋人選択となったと考えられる。また、その異性を通して、被面接者自身が何かに気付き、考えを深めてゆくことは、自己実現の大きなヒントとなると考えられる。事例２においては、被面接者が少しタイプの違う異性と関係を続けてゆく中で、自分自身のことを振り返り、新たな面に気付き変化してゆく過程を詳しく伺った。また、不意に出たとでもいうような“自分自身についての補足のような発言”が２事例に共通して見られ、それには必ず“笑い”が伴っていた。それは内省による新たな気づきの表れであり、その発言が被面接者の内的発展をさらに深めてゆく大切な手がかりになると考えられる。

恋人や結婚の相手を選択する際に、意識的領域が広いままの選択・無意識的領域が広いままの選択のどちらがふさわしいかは当人によって異なってくる。また、どこまで意識的になろうとも、無意識を駆逐することはないのである。どのように選択したかということに関わらず、その異性との関係を続けてゆこうとするのであれば、何らかの困難や不愉快なことが生じる時もあろう。自分がどのようなことを異性に投影しているかに気づき、アニムスとの同一化の危険にさらされながらも、自らの心の中でアニムスとの対話を続けてゆくことが、女性の自己実現の過程である。また、そのような自己実現過程にある女性にとって、親密な異性との関係は、自己実現の場となるのではないだろうか。

【引用文献】

河合隼雄　1967　ユング心理学入門　培風館